

# イギリス慈善学校のリテラリー・カリキュラム ジェイムズ・トールボットの教師用 手引書『クリスチャン教師』(1707)

鶴見良次

キリスト教知識普及協会(The Society for Promoting Christian Knowledge, 以下 SPCK と略記)は18世紀のイギリスにおいて英国教会の教義の普及と、貧しい子供たちのための慈善学校の設立や運営に携わった組織である。同協会が1698年に創設される以前にも、すでに各地に慈善学校は存在していた。ただし、全国の教会区における教育環境は一様ではなく、組織的な整備が求められていた<sup>1)</sup>。同協会の創設当時の急務は、教師の資格に関する規定とシラバスの決定およびその普及であった。北ヨークシャーのスポフォース主任司祭ジェイムズ・トールボットの『クリスチャン教師』(1707)(図1)<sup>2)</sup>は、同協会によって執筆の依頼がなされ、同協会のために出版された教師用手引書である。副題には「慈善学校をはじめとする公的教育に従事する者の任務」とあり、「キリスト教知識普及協会会員たる尊師、諸閣下ほかすべての諸氏に」献じられた。教師資格の規定や教育の内容や方法についての全般的な指示を含む同書は、同

1) W. K. Lowther Clarke, *A History of S. P. C. K.* (London, 1959), p. 21 を参照。

2) James Talbot, *The Christian School-Mater: or, The Duty of Those Who Are Employ'd in the Publick Instruction of Children: Especially in Charity-Schools* (London, 1707; repr. Gale Ecco Print). Talbot と Talbot の2通りの綴りがある。同書に先んじて出版された教理問答書の著者としてはtが1つである。史書においても Talbot とされることが多い。なお、SPCK が子供向けに出版したトラクト(宗教的小冊子)に *James Talbot: or, The Importance of Recollecting 'God Sees Me at All Times'* (London, [n. d.]) があるが、これはスポフォースの Talbot とは無関係の架空の人物が善良な靴職人になるまでの物語である。

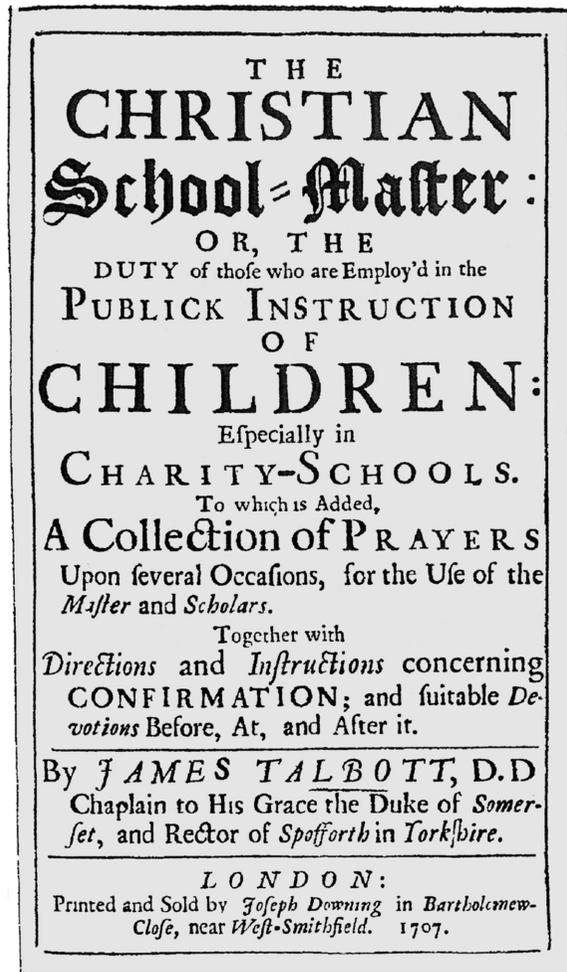


図1 『クリスチャン教師』(初版)表紙

協会の公式の教師用手引書として全国に流布し、18世紀を通して慈善学校教師によって用いられた。SPCKの年次報告書には各教会区の学校数やその生徒数についての報告は見られるが、個々の学校の教師やその指導方法、あるいは具体的なシラバスなどに関する記載は乏しい。スポフォース校の置かれた現状の認識をもとに執筆された『クリスチャン教師』からは、盛んに慈善学校の建設が進められた18世紀初頭における基本的な教育の理念や目的、教師に求められた能力や資格、そして宗教的な教材を音読し、暗唱し、実践的な演習を行い、試験を受けるという学習法によるシラバスのあらましを見ることができる。また、SPCKが推薦書として挙げる他の手引書がもっぱら宗教と道徳の教育のためのものであるのに対し、同書はリテラリー・カリキュラムと呼ばれた教理

問答書や聖書などを教材とするリーディング指導の内容と方法を含んでいることに特徴がある。本稿では同書の検討を通して、草創期のイギリスの慈善学校におけるカリキュラムの内容とその規範化について考察したい。

## I

『クリスチャン教師』の著者ジェイムズ・トールボットは、1664年にロンドン中央部ウェストミンスター・セント・マーガレット教会区に生まれた。ウェストミンスター校、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに学んだ後、同カレッジのフェローとして古典文学を講じ、多くの詩やセネカの芝居の翻訳などを出した。1690年代には、ウェスト・サセックス州ペットワースでケンブリッジ時代に大学総長であったサマーセット卿の秘書と牧師を、その子息で後のハートフォード卿の家庭教師を務め、一方ロンドンで詩人ドライデン、作曲家ヘンリ・パーセルらとの交流を持つなど、華々しい活動を行った。さらにケンブリッジでは大学出版局の設立に尽力し、ホラチウスの著作の編纂に携わった。1699年にはヘブライ語欽定講座担当教授となった。1700年にスポフォースの主任司祭に任命された後にケンブリッジを離れた。優れた古典語・古典文学者としての経歴を持ちながら、地方都市の主任司祭として貧しい住民に英国教会の教義を説き、読み書きと聖書を教える学校の設立に力を注いだことに注目すべきである。学問や神学の基本となる古典語から、英語による教義と英語の読み書きの普及へと、トールボットの関心と活動の中心が移っていたと言える。民衆の英語の読み書き教育の興隆期である17世紀後半から18世紀にかけての時期に知識人に要請されたもののありかを示している。トールボットが肩入れをしていた時期のスポフォース校の教師ウィリアム・メトカーフモラテン語文法の授業もできる知識を持っていたが、同校では貧民児童に必要な英語の読み書き、算数および教理問答のみを教えた<sup>3)</sup>。

ところで、SPCKが発足し、言わば運動のかたちで盛んに慈善学校建設が行われるようなる背景には、17世紀末においてもカトリック系学校が一定の勢

---

3) R. W. Unwin, *Charity Schools and the Defence of Anglicanism: James Talbot, Rector of Spofforth 1700-08* (York, 1984), p. 8を参照。トールボットと音楽との関わりについては、R. Unwin, '“An English Writer on Music”: James Talbot 1664-1708' *The Galpin Society Journal*, 40 (1987), 53-72を見よ。

力を持っていたことがある。それに対抗すべく、非国教徒を含むプロテスタント勢力も学校建設に乗り出していた<sup>4)</sup>。スポフォースにおいてもその事情は明らかであった。トールボットのスポフォースでの宗教・教育活動を論じた『慈善学校と英国教会の防衛』の著者 R・W・アンウィンによれば、同教会区では清教徒革命を経た後もカトリック教会が影響力を保っており、信者数の割合は近隣の地域内では最も高かった。当時はジェームズ 2 世のカトリック擁護を経て 1689 年に信仰自由令の対象からカトリック教徒が除外されてまだ間がない時期であった。アンウィンが示すボードリアン図書館所蔵資料の 1676 年の大まかな調査によれば、住民数 1,100 に対し、ローマン・カトリック教徒 51、他の非国教徒 15 であり、非国教徒の割合は 6 パーセントであった。たとえば近隣のソーナーでは住民 335 に対し、カトリック 4、他の非国教徒 0、割合 1 パーセントである。カトリック 14、他の非国教徒 0、割合 14 パーセントのウォルトンをのぞけば、他の近隣教会区も非国教徒の割合は 1 ないし 2 パーセントである。スポフォースがカトリックの影響の大きく残る地区であったことがわかる。カトリック教徒には学校の運営が禁じられており、外国のカトリック学校への留学にも重い罰が課されていた。それにもかかわらず、英国教会牧師を害する具体的行為を行わない限り、カトリック教徒は共同体の中で比較的自由に生活することができた。1700 年代に入っても、同教会区におけるカトリックの影響は衰えていなかった。ことに地区の有力なカトリックのジェントリーが貧しい階層の住民に与える影響について、トールボットは早くからその懸念をしばしば SPCK に伝えていた。トールボットは 1705 年に SPCK に、同教会区には「無知で」貧しいカトリック信者が多いこと、スポフォースの 2 人の神父によって教理問答や読み書きの初歩が教えられていることなどを伝え、英国教の教義による教理問答の教育、教会での定期的な講話、キリスト教の知識についての子供のための日曜ごとの試験などの必要を訴えた。トールボットは対抗策を議会に働きかけることを SPCK に訴えたが、期待する対応は得られなかった。私的組織として、地区の公的な問題への介入は行わないとの協会の方針によるものであった<sup>5)</sup>。

そもそも、同教会区の学校教育の進展は思わしいものではなかった。人口密

4) M. G. Jones, *The Charity School Movement: A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action* (Cambridge, 1938; repr. 1964), pp. 110-11 を参照。

5) Unwin, 'Charity Schools', pp. 5-6, 19-20, 12 を参照。

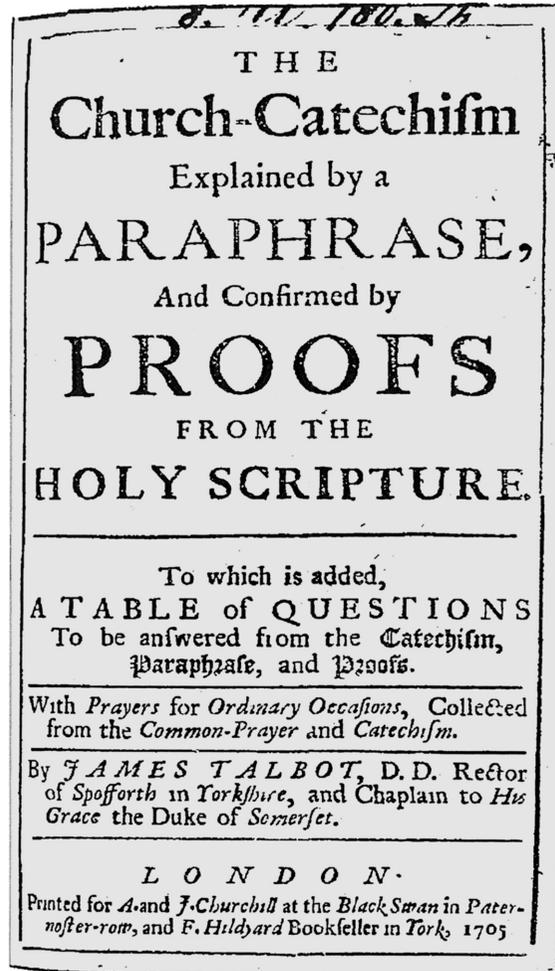


図2 『言い換え教会教理問答』(初版)表紙

度が高くある程度豊かな近隣農村部の教会区において学校教育が比較的盛んであったのに対し、小さな集落の集合からなるスポフォースでは低調であった。17世紀を通して、特に教師の養成は遅れており、たいていは教会区助任司祭が副収入を得て教師の代用を果たしていた<sup>6)</sup>。SPCK に働きかけるとともに、トールボット自らも地元民とその子供のために『言い換え教会教理問答』(1705)(図2)<sup>7)</sup>を刊行した。この教理問答書はロンドンのセント・ポール寺院裏バタノスター街のオーンザムとジョン・チャーチル兄弟とヨークのフランシ

6) 同上論文, 15 - 16 頁を参照。

7) James Talbot, *The Church-Catechism Explained by a Paraphrase, and Confirmed by Proofs from the Holy Scripture* (London, 1705; repr. Gale Ecco Print).

ス・ヒルディヤード書店によって出版された。チャーチルはロックの『金銭論』(1696)なども出した大手の版元であった<sup>8)</sup>。献辞は「スポフォースの住民へ」と題され、冒頭礼辞は「親愛なるわが同朋，同教会区民へ」である。教理問答書はキリスト教知識の初歩を問答形式で解説したものである。別稿でくわしく論じたように、多くの場合リーディングの教則本を兼ねており、アルファベットや綴字法を学びながら聖書の内容を理解する教材として「クリスチャンのABC」とも呼ばれ、慈善学校における最も初歩的な宗教＝英語教材であった<sup>9)</sup>。トールボットの『言い換え教会教理問答』の読ませ方についてはIV節であらためて触れる。

トールボットが自らにとっての急務と考えたのは、今後全国で急速に建設が進む学校のための統一の規則と教育方法を規範化することであった。『クリスチャン教師』執筆の動機を「これらの学校に教師として勤めるすべての者に有用な規則や教育方法を規定することが(……)ぜひとも必要であると思われた」(2頁。傍点は原文のイタリック体による強調を示す)と記している。彼は全国的な学校制度の整備にいまだ着手していないカトリックや他の非国教勢力に先駆けて規範となる教師用指導書を作成し、それを発足を見た SPCK のネットワークを活用して普及させることによって、教育の内容と方法の統一化と均質化を目指した。これは19世紀後半のイギリスにおける公教育制度の成立へ向けての慧眼であり、慈善学校がイギリスの公教育の重要な礎であったことの具体的な理由であると言える。

SPCK の1710年の年次報告書には、トールボットが生前しばしば学校を訪問していたと言及がある<sup>10)</sup>。『言い換え教会教理問答』を刊行し、地域のカトリック勢力に対するさまざまな対抗手段を模索し、近隣地域をも含む北ヨークシャーの慈善学校建設への肩入れを行う一方『クリスチャン教師』を書き上げたトールボットは、その刊行の翌年に没している。SPCK 草創期にあって、地元の慈善学校の設立や運営に尽力するとともに、SPCK 校のカリキュラムの

8) Henry R. Plomer, *A Dictionary of the Printers and Booksellers Who Were at Work in England, Scotland and Ireland from 1668 to 1725* (Oxford, 1922; repr. 1968), pp. 69-70, 153-54 を参照。

9) 拙論「『教理問答付きABC』の伝統 イギリスのチャリティー・スクールにおける英語綴字教育」(『成城イングリッシュモノグラフ』40号, 2008, 265-87頁), および Ian Green, *The Christian's ABC: Catechisms and Catechizing in England c. 1530-1740* (Oxford, 1996) を見よ。

10) *An Account of Charity Schools Lately Erected in Great Britain and Ireland* (London, 1710), p. 37.

規範化にきわめて大きく貢献した牧師 = 教育論者の一人であったと言える。

## II

『クリスチャン教師』はトールボットが SPCK の委託を受け、同協会によって出版されたものである。著者としてのトールボットの推挙はノッティンガムの助祭長でポルトン・パーシーの主任司祭ウィリアム・ピアソン、あるいはヨークの大主教ジョン・シャープによるものとされる。原稿の送付を受けた協会の4名の出版委員によって好意的な報告がなされ、初版1,000部の刊行が認められた。うち特装本75部がサマーセット卿、ウェストミンスター校校長などを含む貴顕に献呈された<sup>11)</sup>。版元は別稿で論じたトマス・クランプの慈善学校用スプリング教科書『正書法解剖』<sup>12)</sup>を1712年に出版するロンドン、セント・バーソロミュー・クロースのジョウゼフ・ダウニングであった。1707年の初版に続き11年に第2版が出された後、18世紀を通してチャールズを初代とするセント・ポールズ・チャーチャードのリヴィングトン一族によって何度か版を重ねている。鶴見所蔵のものは1782年版である。イングリッシュ・ショート・タイトル・カタログには97年の「新版」がある。ケンブリッジ大学とヨーク大学の図書館所蔵も初版と97年版である。ブリティッシュ・ライブラリーにはさらに「1782年版の新版」と銘うたれた1811年版がある。リヴィングトン一族は18世紀半ばから19世紀半ばまで、代々英国教系の神学書やリチャードソンの小説などの出版を手掛けた大手の版元であり、1760年頃にSPCKの指定版元となっている<sup>13)</sup>。版数は多くないが、およそ100年間読み続けられたことに大いに意味がある。その間、同書に示された慈善学校の教育理念が大きく変更されることがなかったと考えられるからである。この100年間は、教育の寄付基金の中心的な対象がそれまでの文法学校から徐々に慈善学校

11) SPCK Archives の資料に基づく Unwin, 'Charity Schools', pp. 22-23 を参照。

12) [Thomas Crumpe], *The Anatomy of Orthography: or, A Practical Introduction to the Art of Spelling and Reading English* (London, 1712). 拙論「1音節でも9文字の単語は最後に学ぶトマス・クランプ『正書法解剖』と18世紀初頭のイギリスにおけるスプリング教育」(『成城イングリッシュ モノグラフ』43号, 2012年3月, 507-26頁)を見よ。

13) 第2版はオックスフォード大学図書館所蔵。リヴィングトン一族については, Plomer の前掲書, 254頁, 1726年から1775年までを扱うその続編 (Oxford, 1932; repr. 1968), 214-15頁, および DNB を参照。

に移り変わる時期でもあり、また世紀末には日曜学校による貧困児童教育の進展が慈善学校のそれを凌ぐようになる時期であった。その間の慈善学校における宗教・読み書き教育を支えた指導法を知る上で同書以上に示唆を与えるものはない。以下でその内容をくわしく見てゆこう。

### III

著者は全 144 ページからなる『クリスチャン教師』を「教師の資格」と「教師の職務」の 2 部構成であるとしている。教師の職務は「教育」(Instruction) と「しつけ」(Discipline) に分けて論じられており、巻末には祈祷集が付されている。目次と本文とに節や項目の立て方の若干の異同があることや、それらのナンバリングにローマ数字とアラビア数字が混在することなどによって、目次からは全体の把握はややしにくい。最もページ数が多く、内容の中心をなすのは「教育」に関する部分である。本稿でも、読み書き教育を中心とする教師の職務についておもに見てゆく。

#### 1. 教師の資格

1. 宗教, 2. 道徳, 3. 知識, 4. 年齢と職業, 5. 認可の 5 項からなる (4 - 23 頁)。

1. 英国教徒であり、その教義への帰依を誓う者であること。
2. 宗教心の元となる道徳心をもっていること。
3. 貧しい子供たちを教える「低い階層の、才能に乏しい教師」に求められるのは、高度な知識ではなく、1. キリスト教教義の基礎, 2. 正しい筆記, 3. 算数の基礎, 4. 教育者としての天分である。この項目には、新任教師への助言が示されている。現職教師から多様な能力や性格の生徒に対応する指導についてのアドバイスを受けること、授業参観を行うこと、また授業に補助として参加することなど。
4. 25 歳以上であること、「身体や言葉に障害がないこと」(no Deformity in his Person, nor Defect in his Speech (p. 23))。
5. 教会区牧師の補助としての職務の性格上、司教による教師としての正式な認定を受ける前に、上記の 4 つの資格条項のうち少なくとも宗教と信仰について牧師の承認を得ること。

これらのうち、第 5 項を見ると、SPCK 草創期の慈善学校の教師に最も求め

られたのは英国教徒としてのたしかな宗教信条であったことがわかる。

## 2. 教師の職務（教育）

3つの部門からなっている。すなわち1. 宗教教育, 2. 道徳教育, 3. リーディング, ライティング, 算数などの教科教育である(24 - 86頁)。

トールボットが挙げるこれらの3つの部門自体は今日の学校教育においても見られるものであり, この時期に特別なものではない。この教師用手引書の特徴の1つは, これら3つに関する記述のそれぞれが総ページ数のなかに占める割合であろう。宗教教育が3ページ, 道徳教育が51ページ, そして英語や算数などが8ページである。この手引書の教育の中心は, 少なくともその分量から見るかぎり, 宗教ではなくキリスト教の教義にかなう道徳である。もちろんこのことはそれらが慈善学校のカリキュラム内に占める割合とは必ずしも一致しない。ここで注目すべきは, SPCK のこの代表的な教師用手引書では, 宗教的な知識そのものの習得に関しては, 祈禱や教理問答の暗唱の練習法についての簡単な説明だけがなされていることである。宗教とリーディングの教育のよりくわしい内容と方法は, 教理問答や, 聖書からの抜粋やあらすじの付いたアルファベット=綴字教科書にその大部分をゆずっていると考えることができる<sup>14)</sup>。本稿では, それらの教科書には必ずしも整理して述べられていない慈善学校の教育の理念と, いわゆる知育のカリキュラムについてくわしく検討したい。

まずトールボットが「教育について」の部分の冒頭で述べるのは次のような教育観である。

As to the Business of *Instruction*, it must be consider'd, that the Minds of Children, like blank Paper, or smooth Wax, are equally capable of any Impression: The Use and Exercise of our Understanding advances by slower of Degrees than that of our Limbs, and requires more Assistance from without, to Guide and Direct it. In this tender Age, the Mind seems to be purely Passive, and Susceptible only of such Notions, as it receives from others, by the Means

14) これらの宗教的テキストによるアルファベット=綴字教育については, 注9に挙げたもののほか「ABCと聖書 17世紀後半のイギリスにおけるアルファベット=綴字教育とその教材」(『成城文藝』206号, 2009, (1)-(10)), 「新約聖書が完璧に読めること」 18世紀イギリスにおける初等リーディング教育の達成目標」(『成城文藝』207号, 2009, (22)-(43))などの拙論を見よ。

of the outward Senses, which (as the Author to the *Hebrews* observes) *must be Exercised by Use to discern between Good and Evil.* (p. 24)

子供の精神は「無地の紙やなめらかな蜜蠟」の表面のようなものであり、どのような影響も受けるとする精神の「白紙状態」(tabula rasa)の比喩からは、すぐにジョン・ロックの『教育に関する考察』のいくつかの節が思い出される。トールボットはロックの表現を意識して書いていると考えてよい<sup>15)</sup>。ロックは同書の結論部分で考察の対象とした幼い子供を「ただ白紙、あるいは好きなように型に入れ、形の与えられる蜜蠟に過ぎない」 (§217) と考えたと記している。またトールボットの「柔らかく傷つきやすい年頃」(this tender Age) という言葉は、ロックの「われわれの敏感な幼年時代」(our tender Infancies) (§1) とか「子供〔の心〕がまだ傷つきやすく、柔軟な年頃」(the tender and flexible Years) (§177) といった表現とほぼ似た児童観を表している<sup>16)</sup>。いずれも、わずかな印象が生涯にわたる影響を与える幼年期の教育の重要性を述べている。

しかし両者の「白紙状態」の比喩には違いも見られる。ロックはセクション1の引用箇所では‘Good or Evil’ という表現を、幼い頃の教育が生涯にわたって影響を与え、人間を「良くも悪くも」(服部訳)するという文脈で用いているのに対し、トールボットは上の引用の末尾で、新約聖書「ヘブル人への手紙」第5章第14節の幼子の譬えに倣って、幼い頃から「善と悪 (Good and Evil) を見分けるための」感覚の陶冶が重要であることを説いている。両者の幼児教育のとらえ方の違いは明らかである。ロックが精神の白紙状態を幼児教育一般の意義を論じる比喩として用いているのに対し、トールボットはそれをあくまでも宗教的・道徳的白紙状態についての議論の文脈に置いているのである。著者はロックの思想を援用しつつも、最終的に「善きキリスト教徒にして誠実な使用人」<sup>17)</sup>となるべき子供の発達について論じているのであり、そこに慈善学校教育の特質が認められるのである。

## 1) 宗教教育

トールボットは24頁からの4ページほどで、まず幼い生徒への宗教知識の

15) Jones の前掲書, 76 - 77 頁を参照。

16) 『教育に関する考察』からの引用は, John Locke, *Some Thoughts Concerning Education*, ed. by John W. and Jean S. Yolton (Oxford, 2000) (ロック『教育に関する考察』服部知文訳, 岩波文庫, 1967)。

17) Jones の前掲書, 5 頁。

基本的な指導法を示してゆく。ここでは宗教的知識の内容については触れられておらず、幼い子供への宗教教育の第一歩、すなわち文字の読めない子供と読める子供それぞれに対する祈祷などの覚え方についての指導法が示されている。文字を読むことのできない幼い生徒も入学後ただちに使徒信条と主の祈りを教師や上級生の口伝てに覚え唱える練習をし、その後教師に聞いてもらう。同様の仕方朝晩の祈祷を覚える。主の祈りに続く応答を一部変えて、朝晩の祈りに用いてもよい。食前・食後の感謝の祈りも同様に習う。一方、文字が読める生徒は朝晩の祈りを覚えた後、教理問答を学ぶ。教師は生徒一人一人に「明瞭にはっきり」(27頁)発音するよう指導し、教会での試験に備えさせる。さらに毎週2回、牧師が認める適切な教理問答解説書にしたがって、すべての部分について説明することでより生徒の理解を深める。このような教理問答の指導法の部分に、慈善学校における宗教教育と読み書き教育の関係が端的に表れている。目的は宗教的な知識の習得と理解、そしてその発表であるが、それを可能にするのが、口述の正確さと確実なリーディングの技術である。教師による一人一人の生徒の発音指導、同級生の前での発表など、能動的な練習が基本となっていることが特徴である。

## 2) 道徳教育

27頁からのおよそ50ページは、第2の部門である道徳教育の解説である。教理問答書などを通して学んだ教えを常に心に置き、生活の上で実践してゆくこと、そして教師がそれをことあるごとに促すことの重要性が説かれている。生徒の家や学校や地域での生活における道徳の指導についての手引となっている。道徳知識を習得するための技術的な方法として注目すべきは、それぞれの美德や悪徳などの理解のために、必ずその裏付けとなる聖書の一節が引用されていることである。引用は複文などのかたちで自然に接続されているため、教師は聖書の教えを自分の言葉としてわかりやすく生徒に示すことができる。たとえば、生徒は「就寝前の祈りの際には『<sup>しず</sup>かに<sup>じぶん</sup>自分の<sup>こころ</sup>心に<sup>かた</sup>語り』(詩篇第4篇第4節)、一日をどのように過ごしたかを自分を甘やかすことなく厳しく顧みなければならぬ」としている。(75頁。詩篇からの引用は原文ではイタリアック体。訳は日本聖書協会版による。)道徳を身につけさせるために、生徒自身に聖書のリーディングをさせ、その内容を理解させることの意義が示唆されている。こういうところに、聖書を媒介として道徳教育とリーディング教育とを具体的に結び付ける発想が見られるのである。

### 3) 教科教育

78 頁から 86 頁までの 8 ページで扱われるのはリーディング, ライティング, 算数である。後に初等教育における基礎技能としての 3 つの R (three Rs = reading, 'riting, and 'rithmetic) と呼ばれるようになるものである。これら 3 つについて著者は, 慈善学校の生徒たちが身につけるのに「最もふさわしく, 彼らが生活する上でどんな状態や環境にあっても有用なもの」であると言う。(78 - 79 頁) この文言からは, これらの学習が有利な就職・就労に結び付くとする慈善学校教育の世俗的な有用性についての認識が見て取れる。

#### リーディング

リーディングの指導は次のように指示されている。1. スペリング・ブックを用いてのアルファベット, 綴字法, 音節の学習。2. 文として単語を結び付けて読む練習。特に注意すべきは, 不注意による訥弁や吃音, 子供どうして影響しあいがちな不快な口調を避け, 各音節, 各語を「はっきりと, 明瞭に, 聞き取りやすく発音すること」であるという。3. 句読法を教え, 「文ごとにはっきりと明瞭に読み, その内容をしっかりと理解するようにさせる。」(79 頁) トールボットのリーディング教育の教授法の基本は, 宗教的なテキストを聞き, 読み, 暗唱することで, 内容と表現を一体のものとして身につけてゆくというものである。

教材としては, 1. 教理問答書, 2. 祈祷書, 3. 詩篇歌集, 4. 聖書, 5. 教理問答解説書, 6. 『人間の義務の全容』(1658)<sup>18)</sup> が挙げられ, それぞれの読み方の指導が示されている。次にそれぞれを見てゆく。

教理問答書については, 言葉を目で見ながら暗記してゆくのがよい。文字として見たものが記憶されるのは自然なことなので, 暗唱することは決して難しいことではない。同様の方法で教理問答書を読み通す。

教理問答書の次にリーディングの教材とするのは祈祷書である。朝晩の祈祷をはじめ, 連祷, ニカイア信条, アタナシオス信条なども用いる。これらを学ぶことで, 教会での礼拝への参加ができるようになる。リーディングの得意な生徒を指名し, 毎週聖歌と応唱を覚えさせ, 朝晩の礼拝で第 2, 第 3 の特祷を暗唱させるのが効果的である。

それに続けて学ぶべきは詩篇歌集である。特に暗唱すべき 20 の詩篇の番号が挙げられている。

---

18) *The Whole Duty of Man.*

詩篇歌集の次は新約聖書へと進む。マタイによる福音書の山上の垂訓、キリストの奇跡物語、たとえ話などを学ぶ。著者が聖書を読むことの娯楽の側面に触れていることは興味深い。新約聖書の物語も、日曜や祝祭日の食事の際の生徒どうしの楽しい話題となるものであるという。

旧約聖書については、教師の指示にしたがって、箴言、伝道の書などの章を読み、暗唱する。

以上の教材による学習を済ませたうえで、教理問答解説書によって教理問答の理解をさらに深め、その教義を聖書の記述で確認する。解説書は単に勉強として読むだけではなく、入念に暗記する。週に1度は教師が生徒を指名し、全生徒の前で一部を暗唱させる。推薦書はジョン・ルイスの『教会教理問答解説』<sup>19)</sup>である。たえずこの方法で読む練習をし、暗記した内容を忘れないようしばしば練習する。これらの基本的な教材でキリスト教知識の基礎は身に付く。上級の生徒がその原理原則を深く理解し、人の務めについて学ぶための最良の書が『人間の義務の全容』である。17世紀半ば以降よく読まれた一般信徒のための著者不詳の信仰手引書である。祝祭日ごと、あるいは少なくとも主の日に、同書の1セクションを1人ないし数人の生徒に全員の前で朗読させる。その後『教理問答術』(1691)<sup>20)</sup>巻末に付された各セクションを問いの形に要約したものを1人の生徒に読ませ、他の生徒が「はい」「いいえ」で答える。

リーディング教育のまとめとして、著者は、特に幼い子供にとって面白いと思えない内容のものを読ませる場合には、彼らに退屈や苦痛を感じさせない工夫が必要であるという。そのために、まじめな勉強の合間に、適宜、有益だが楽しい本の問題をさしはさむことを勧めている。

### ライティング

ライティングはリーディングが十分に上達した後すぐに進むべき第2の技能と規定されている。

「ライティングを教える教師ならだれでも熟知している」として、具体的指導法は示されていない。ただし、「きれいに、読みやすい文字で」書くこと、また文字は徐々に小さく書くようになるものなので、当初はやや大きめに書か

---

19) John Lewis, *An Exposition of the Church-Catechism*. SPCK の *An Account of Charity-Schools in Great Britain and Ireland* (London, 1713), p. 78 の学校推薦図書一覧に挙げられており、ブリティッシュ・ライブラリーに第58版 (London, 1820) の所蔵がある。

20) *The Art of Catechising: or, The Compleat Catechist* (London, 1691).

せることなどが指示されている。(84頁)手本を見なくても書けるようになったら、聖書や『イソップ寓話』の文を書写することで、よりきれいに書けるように練習し、正しい綴字法と句読法を身に付ける。原文と対比し、誤りをすべて直し、そのうえで教師に提出する。ここでも指導として際立っているのは、書写練習 原文との対比 訂正 提出(評価)という練習の手順の具体性である。書写の段階から教師が各生徒の運筆に目を配り、指導したと考えられる。

### 算数

第3の技能は算数である。通常の会計に必要となる四則混合計算であり、卒業する(学校を去る)までにすべての生徒が完璧にしておくべきものとされている。

### クラス編成など

さまざまな段階の子供たちが学ぶ慈善学校で、これら3つの技能の授業を行うためのクラス編成はどのようになっていたのだろうか。トルボットは、授業は4つにクラスを分けて行うとしている。すなわち、1. ホーンブック、プライマー、スペリング・ブックなどでアルファベットとリーディングの基礎を学ぶ。2. 詩篇歌集、新約聖書を読む。3. 聖書および教師、理事などが指定する有益な書を読み、さらにライティングを学ぶ。4. ライティングの上達が見られ、十分な成績をおさめた生徒が算数を学ぶ。

したがって『クリスチャン教師』に示されるクラス編成は、下級、中級、上級、最上級の4つからなる。このクラス編成については、IV節で改めて論じる。

3つの技能についての指導法および学級編成についての項目の後で、著者は、慈善学校におけるラテン語教育の不要を説いている。それは貧しい子供たちに「害を及ぼすことはなくとも、不必要で、ふさわしくない」(85頁)という。その理由は3つである。1. 幼年学校(Petty school)でごく初歩的な内容を習得するだけでは、ラテン語を必要とするような職業のうち最下等の仕事にしか就けない。2. 彼らにふさわしい商いや働き口を得た場合、それは不要となり、忘れてしまう。3. 生かじりの知識による鼻もちならない虚栄心を育てる。

### 3. 教師の職務(しつけ)

87頁以降は、もう1つの教師の職務である「しつけ」についての考え方とその指導方法が約30ページにわたって論じられている。ここではその概要のみ見ておく。

主に2つの内容から成る。1つは学校、教会、家庭における規則と規律につ

いてであり、校則とその指導に関するものである。日課、勉強、休暇、教会での所作などで守るべきことがらがくわしく規定されている。もう1つは、美德、学業、勤勉に対する褒美と懲罰に関する部分である。褒美は表彰と昇級、懲罰は叱責、降級、体罰、放校などによって行われる。

しつけについての部分でも、名前こそ示されていないが、著者はロックの『教育に関する考察』の一節を引用符付きで掲げている。「称賛と叱責」の項目で、著者は次のように書く。

'T is very truly observed by a Celebrated Writer concerning *Education*, 'That Children (earlier perhaps than we think) are very sensible of *Praise* and *Commendation*. They find a Pleasure in being Esteem'd and Valu'd, especially by their Superiors, and in the Presence of their Fellows:' And on the other Side, they are so naturally Apprehensive of Shame, and of that State of Disgrace and Disesteem, which attends a just *Reproof* from the same Hands; that, I am confident, a discreet and seasonable Use of these Two Methods of *Discipline*, as Occasion shall require, will in many Cases supersede the rest. (pp. 96-97)

アンウィンも指摘する通り、前半の「著名な教育論者」からの引用部分は『教育に関する考察』のセクション57の冒頭である<sup>21)</sup>。概してピューリタンの児童観を汲む厳格で訓戒的な教育が行われていたと考えられがちな慈善学校におけるしつけの原理が、子供の発達段階や欲求などを考慮したロックの近代的な徳育論を意識したものであったことにも注目すべきである。

118頁から133頁までは教師と生徒が用いる祈祷集となっている。教師用の祈祷、教師と寄宿生用の朝晩の祈り、通学生用の朝昼晩の祈り、下校時の祈り、祝祭日の朝晩の祈り、幼い生徒用の朝晩の祈り、年長生のための朝晩の祈り、教会での祈りなどである。その後に堅信式の説明が11ページ続く。

## IV

SPCKの1713年の年次報告書に載せられた教師用推薦図書一覧(78頁)には、トールボットの書のほかに、いわゆる教師用指導書とおぼしきものがほか

21) Unwin, 'Charity Schools', p. 23 を参照。

に3冊挙げられている。すなわち、ジョージ・モンローの『少年宗教教育方法論』(1700)、『家庭・学校用少年聖書教育方法』と題された発行年不詳の書、1704年刊と思われる著者名のない『児童キリスト教教育』である<sup>22)</sup>。そのうち、モンローの書はSPCKがツールボットに手引書の執筆を委託するにあたって参考にするように推薦したものである<sup>23)</sup>。『クリスチャン教師』刊行の数年前にエジンバラのジョン・リードによって出版された。扉に書かれている同書の目的は、「子供の教育における大きな誤りを指摘し、いかに幼児期、児童期の子供に向き合い、彼らに神の存在を深く信じさせ、神の本質についての観念を与え、神の完全さにまねばせることで、いかにして神についての真の知識を伝えるかについての忠言」である。312ページからなるこの手引書の全編が、両親が知力や精神の定まらぬ幼い子供にキリスト教の知識とそれに基づく道徳をいかに教え込むかを解説したものである。また『家庭・学校用少年聖書教育方法』は教義の解説書、1704年の書の副題は「万人のための(特に慈善学校向けの)宗教の基本原則とクリスチャンとしての義務についての友への書簡」である。

モンローのものをはじめとする他の手引書がツールボットのそれと大きく違うのは、カリキュラムの組立てを意識して指導の手順を示す手引書とはなっていないことである。このことは、宗教教育をリーディング教育と結び付けて子供の言語体験のなかに組み込む、いわば近代的な宗教=英語カリキュラムの発想のあるなしであると言ってもよい。ツールボットが教師用手引書としてモンローの書を具体的に参考にしたと考えられるのは、宗教や道徳についての指導の理念と、それぞれの内容に関わる聖書の章節などの引照を欄外に付す編集の仕方である。

すでに複数の拙論で見てきたように、17世紀から18世紀初頭にかけての慈善学校教師は、教理問答書や聖書を素材とした綴字、文法、リーディングの教則本を指導の手引として用いていた。また、児童の宗教・道徳教育の手引書も数多く流布しており、教師の必読参考書となっていた。それらの書には個々の

22) George Monro, *The Just Measures of the Pious Instruction of Youth* (Edinburgh, 1700); *A Method for the Instruction of Children and Youth in the Sacred History to be Used in Families and Schools* (Northampton, [n. d.]); *Christian Education of Children* (London, 1704). Monroのもの以外は鶴見が確認したものと同一書名の別書である可能性を含む。

23) Unwin, 'Charity Schools', p. 24 を参照。

内容と目的に応じた教授法や指導法が含まれている<sup>24)</sup>『クリスチャン教師』も全体としてそうした教則本の考え方を踏襲しており、各部分についてはそれらの多くを手本として書かれていると思われる。ただし同書が画期的であるのは、慈善学校における教育の基本理念や、あるべきカリキュラムの全体を簡潔に示したものとなっていることである。カリキュラム全体が示されているとは、宗教、道徳、リーディング、ライティング、算数、しつけなどの教科がすべて配置されているというだけの意味しない。それらの学ばせ方の順序や相互の関係性への配慮を含んだものとなっているということである。

『クリスチャン教師』に示されるクラス編成は、下級、中級、上級、最上級の4つからなることはすでに述べた。たとえば、ロンドンのセント・アンズ校の記録などによれば、10歳前後で下級に入り、徐々に上のクラスに上がってゆき、13歳より上の年齢で最上級を「卒業」する。非国教系のホースリー・ダウン校では14歳を上限とすることが規則書に記されている<sup>25)</sup>。ただし、就学年齢は一定ではなく、より年長で就学することもあれば、短期の就学期間を経て学校を離れてゆく者も多かった。いずれにせよ、トールボットがグレード制のカリキュラムをとっていることは明らかである。リーディング、ライティング、算数という3つの技能は科目として並列しているのではなく、より上級へ進むとともに学ばれるべく縦列している。それは、幼い子供の知的な発達段階に即しているというより、慈善学校における教育内容としての重要度の順を示している。キリスト教の教義に基づく道徳教育を中心に据えて、貧困児童にとって最低限必要な知識を、最短で効率的に与えることを目的とする慈善学校のカリキュラムについての考え方を反映したものである。一般に慈善学校では重んじられなかったとされるライティング教育も、トールボットの手引書を見る限り、十分なリーディング力を付けた後まで就学年数を伸ばせる場合には受けるべきであるとされている<sup>26)</sup>。『クリスチャン教師』においては、慈善学校での学習の達成目標は、あくまでも生徒の年齢や学力、学習進度、将来の展望に照らし合わせて決められ得るのである。

24) 注9と14に挙げた3つの拙論を見よ。

25) J. H. Cardwell, *The Story of a Charity School: Two Centuries of Popular Education in Soho 1699-1899* (London, 1899), p. 9, Clarke の前掲書, 22頁, および *A Brief Account of the Charity School, at Horsly-Down, Southwark* (London, 1714), p. 7 を参照。

26) 慈善学校のライティング教育については別稿で論じる。

それでは、こうしたカリキュラムのもとで、実際にどのような指導が推奨されていたのだろう。慈善学校の教育における最大の課題は、宗教教育と読み書き教育を子供の発達段階に合わせてどのように連動させるかであった。著者はそれについてのさまざまな工夫を提示している。教材のリーディングと暗記を終えた後、教師のもとで暗唱を行う、生徒どうしで問答を行う、クラス全員の前で暗唱を行う、そして教会で教理問答の試験を受けるというものである。音読、暗唱、演習、試験が基本であり、学習の成果が常に教師や同級生、教会の会衆者らの反応によって評価される。これらの学習法によって、宗教とリーディングの教育が、小規模の教室で、教師と生徒、あるいは生徒どうしの親密で多様なコミュニケーションのもとで進められていたと考えられるのである。SPCKの年次報告書によれば、スポフォース校の生徒数は1710年に15名、2年後も同じく15名である。ところが、1724年には40名となっており、この間の慈善学校教育の発展が顕著であったことがわかる<sup>27)</sup>。少なくともツールボットが手引書を執筆した頃のスポフォース校では少人数の生徒に教育が行われていたと言える。

『クリスチャン教師』のこのような指導法の基本は、すでにその2年前にツールボットが刊行した『言い換え教会教理問答』にすでに示されていたものとほぼ同じものである。彼は献辞で、祈祷書や聖書に用いられている難しい言葉に言い換えによる説明を加え、各問答のあとに聖書の該当箇所からの引用による証明を示すことによって、よりわかりやすいものにする工夫をしたと記している。さらに家庭や慈善学校、あるいは職場で子供が使うことを意識して、親、教師、雇い主らへの助言が加えられている。子供たちは精読するだけでなく、教会の会衆の前で教理問答を暗唱し、家では当該箇所を参照できる欄外の引照にしたがって聖書の勉強をする、牧師は教会で教理問答を教え、試験をする、教理問答の試験では問いへの答えを暗記して反復するだけでなく、答えに付随することがらについても問う、親や雇い主は日曜日ごとに子供に教会での教理問答の授業や試験を受けさせる（怠った場合は大人も子供も罰せられる）、次の試験までの間に親、教師、雇い主は子供に教理問答を入念に教える、などである。

---

27) *An Account of Charity Schools Lately Erected in Great Britain and Ireland* (London, 1710), p. 37, *An Account of Charity Schools in Great Britain and Ireland* (London, 1712), p. 45, および Jones の前掲書, 371 頁を参照。

トールボットのリテラリー・カリキュラムの特徴は、宗教・道徳教育を主たる使命とする慈善学校において、それゆえに、いかにそれと英語＝国語教育とを結びつけるかという根本的な問いかけに答えようとしたものである点にある。すでにピューリタン教師らによって、聖書や教理問答書を素材とした英語教則本は数多く出されていた。それらの多くが、アルファベット＝綴字法、あるいは文法などの知識の習得を具体的な目的としたいわゆる英語教科書あるいはその指導の手引書であった。それに対しトールボットの書は、どのような目的のために、何を達成目標として子供たちにリーディングを学ばせるかについて、理念と方法の両面から説明したものであると言える。慈善学校の目的は、その基金申込書(1699)<sup>28)</sup>の設立趣意に見られるように「貧しい子供たちに読み方を教え、英国教会が唱え説くキリスト教の知識と実践の教育を行う」ことであり、具体的には子供たちが自ら聖書を読めるようにすることであった。そのいわば崇高な目的と、リテラシーを身につけるといふ具体的な目的とを、授業においてどのように連動させるかの基本的な方法がトールボットの手引書には示されている。これらを結び付けるには、まず前提として、その両者を合理的に分割する必要がある。トールボットの具体的な練習を伴う指導法には、本来別の原理のもとにある双方の知識の習得を、どちらの学習にも必要な暗唱とその発表という生徒の能動性によって同時に可能にする工夫が認められる。それによって、ラテン語教育などでは一般的な「音読 暗唱 演習 試験」という学習の形式が、貧しい子供のための宗教＝英語教育の曙の段階で可能となっていたのである。

## V

『クリスチャン教師』は英国教会系の慈善学校の理念に基づいて、具体的な教育内容と指導方法によるカリキュラムを示した画期的な教師用手引書であった。それには3つの理由を挙げることができる。1つは、発足当初のSPCKがその執筆および刊行に直接関与した公式の手引書であること、2つ目が、内容の総合性において類書がないこと、3つ目が、それがいわゆる慈善学校運動が展開された18世紀全体を通して読まれ、教育の内容と方法を規範化したこと

28) 'A Form of a Subscription for a Charity Schools', in *Educational Charters and Documents 598 to 1909*, [ed.] by Arthur F. Leach (Cambridge, 1911), pp. 539-41.

である。内容の特質としては、宗教教育、道徳教育、読み書きおよび算数の教育、しつけからなる全体のカリキュラムが、生徒が学ぶ順序を意識して考案されていること、そして簡潔だが具体的な指導法が提案されていること、そしてそれがロックの教育論の影響も見られる子供の発達段階を意識したものであることなどが挙げられる。指導法については必ずしも細部にわたる指示が見られるわけではない。ただし、宗教的な教材を音読・暗唱し、演習し、試験するという学習法を民衆の宗教＝英語教育の基本的な方法として普遍化したことは注目すべきである。そこから、ながいあいだ宗教教育と深く結び付いて発展してきたイギリスのリーディング教育が、近代的な初等英語＝国語教育の曙の時期にどのようなとらえ直されたかについての理解を得ることができるからである。英国教会の主任司祭としてカトリック教会の勢力から貧しい者たちの教育を防御するという著者の強い使命感に促され、それまで綴字、教義、しつけ、算数などの各分野に分散していたカリキュラムを統合し、それをコンパクトな手引書にまとめて普及させるという創意によって、同書は勃興期の民衆初等教育の制度化に明らかな刷新をもたらしたのである。

追記 本稿は平成24年度成城大学特別研究助成（研究課題「イギリス慈善学校の教師用手引書の研究」）に基づく研究成果の一部である。